
オシツオサレツ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オシツオサレツ

【Nコード】

N8409F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ドリトル先生に出て来る動物オシツオサレツ。少年達はいるかいないか論争になっていたが西アフリカに行ってみると何と。ドリトル先生のあの動物を話にしてみました。実際世の中何がいるかわかったものではありません。

第一章

オシツオサレッツ

「いないって」

「いるよ」

牧野定文と稲垣昌信は学校の帰り道にこう言い合っていた。見ればいると言っている昌信の手には一冊の本がある。どうやらそれは小説らしい。

「間違いなくいるよ」

「それは小説だよ？」

定文は眉間に皺を寄せて言ってきた。

「小説のキャラクターじゃないか」

「けれど何処そこにいるって別の本で書いていたし」

「そのシリーズに？」

「うっん、別の作家の別の本」

首を横に振ってから定文に答える。とにかく学校の帰り道で互い必死な顔で言い合う二人だった。

「それに書いていたんだよ。アフリカのさ、中央アフリカにいるって」

「まさか。いる筈がないって」

定文はとにかく昌信の言うことを否定する。そう言っただけ背の低い色白で太目の少年を見るのだった。目がグレムリンという映画のギズモそっくりでとにかく奇麗だ。

「そんなさ。前後に頭が一つずつついてる山羊なんて」

「じゃあドリトル先生のこの話は嘘だっていうの？」

「だからそれは小説じゃないか」

定文は昌信が今持っているその小説を指差した。見ればそれはドリトル先生の本だった。言うまでもなく世界的なベストセラーのあのシリーズである。そのうちの一冊なのだ。

「小説。本当じゃないよ」

「いないっていうんだね」

「賭けてもいいよ」

定文はこうまで言い切る。

「絶対にね」

「じゃあいたら?」

「まさか」

頭からその可能性を否定するのだった。

「そんなことはないって。有り得ないよ」

「中央アフリカにはいるんだけれど」

「じゃあ確かめたいね」

定文はいる筈がないと確信してこう言い切ってきた。

「その中央アフリカに行つてね」

「言つたね」

「うん、言つたよ」

胸を張つて昌信に答えた。

「是非共ね」

「じゃあ行こうよ」

昌信はそれに応えるようにしてまた言つたのだった。

「中央アフリカにね」

「行けたらね」

「今にでも行けるよ」

しかし彼はまた言ってきた。

「何時でもね」

「!?!アフリカだよ」

定文は昌信が何を言っているのか全く理解できなかった。「冗談とさえ思えなかった。そうだと考える程の余裕すらないというのが実情だった。

「アフリカなんだけれど」

「だから行けるんだって」

「どうしてなんだい？」

「ほら、これ」

ここで彼はあるものを定文に対して見せてきた。

「これがあるからね」

「それ……何？」

「パスポート。ほら、うちの中学校って修学旅行台湾じゃない」
「うん」

修学旅行先としては珍しいと言える場所だった。

「そういえばそうだったね」

「だからもうパスポートはあるし」

「けれどそれだけでアフリカは行けないよ」

まだ言う定文だった。最早話のペースは完全に昌信のものだった。彼はそれについているだけといった状況になっていた。

「アフリカに行くには」

「だから。それも大丈夫なんだって」

「どうしてなんだよ」

「ほら、高等部の美作先生」

「美作先生！？」

「今度アフリカ行くんだよ」

このことを定文に話してきた。

「アフリカにね」

「つていうと中央アフリカに？」

「そうだよ。夏休みにね」

「夏休みにかい」

「お金はいらないらしいし」

残る最大の問題は定文が言う前に解決してしまった。

「だからさ。行こうよ」

「美作先生、何でもまた中央アフリカなんか」

定文はそれが不思議でなかった。首を捻りながら述べるのだった。同時に腕を組んでもいる。深く考える仕草である。

「行くんだろっ」

「あの先生の専門ってアフリカの地理学らしいし」

「アフリカの!？」

「そこで宝石を集めたりもしているんだってさ」

「このことも定文にとって意外なことだった。」

「その宝石を奥さんにあげて結婚指輪にしたらしいし」

「何気以上に凄い話なんだけれど」

「とにかくさ。行くよね」

もう半分以上話が決まってしまうていた。なおまだ定文は一言も答えてはいない。その前に昌信が一人で決まってしまうていた。

「中央アフリカに。夏休みに」

「アフリカかあ」

あらためてそのことについて考える定文だった。

「何かなあ」

「アフリカが嫌なの?」

「っていうかオシツオサレツだよね」

「うん」

行く目的は変わらない。やはりそれである。

第二章

「そんなの。本当にいるわけがないのに」
「だからいるんだって」

昌信はまたムキになりだした。どうもこのことにやけにこだわりがあるようである。

「絶対にね」

「まあさ。それで昌信の気が済むんなら」
「いいよね」

「海外旅行だと考えればいいか」

「そうということ。ただしね」

「あと何があるの？」

既に色々言われているのでまだ何かあるのかと思い返した言葉だ。返してみると実際にあるところは定文にとっては悪い意味で予想通りだった。

「まだ。あるの？」

「向こうに行ったら猛獣に注意してね」
いきなりこれだった。

「ライオンとか犀とかさ」

「それはわかってるよ」

これについては覚悟していた。だから驚くことなく言葉を返した。
「もうね」

「何だ。わかってるんだ」

「アフリカっていったらそれじゃない」

アフリカといえばライオン、もうそうインプットされているのだ。た。オーソドックスであるがやはり中学生と思わせる返答だった。
「それはさ」

「まあそうだよね」

「それならわかってるからいいよ。向こうでも注意されるよね」

「それはね」

とりあえず猛獣についての話はこれでおおよそ終わった。

「あと毒蛇とかチーターとか一杯いるけれど」

「それもわかってるから」

「あとはね」

しかし彼はまだ言うのだった。

「虫に注意してね」

「虫!？」

「そう、蠅や蚊にね。それもね」

「そんなの日本にも幾らでもいるじゃない」

こう返す定文だった。

「蠅や蚊なんて」

「刺されたらそれで伝染病になって死ぬらしいから」

「死ぬ……」

流石に死ぬと言われては定文も顔色を変えてきた。青くなっている。

「死ぬんだ」

「向こうの蠅や蚊って凄いらしいよ」

昌信はそんなことまでチェックしているのだった。もう既に行く気充分である。

「手が林檎が中に入ってるみたいに膨れてね」

「林檎が……」

「切り開いたらそこから幼虫が一杯出てね」

「何、それ」

顔をさらに青くさせての言葉だった。

「滅茶苦茶じゃない。そんな虫がいるなんて」

「確かそれが蠅だったかな」

「蠅が……」

「だからさ。注意してね」

ここでも彼と一緒に行くという前提で話す昌信だった。

「くれぐれもね」

「うん……」

「じゃあ夏休みね」

やはり行くのは既に決まっているのだった。結局定文の返事を聞かないうちに。

「行くよ」

「うん」

えらいことになってしまったと思いつつも頷くことしかできない定文だった。時間はあつという間に進み夏休みに入った。そして遂に彼等は中央アフリカに来たのだった。

「暑いなあ」

定文は空港から降り立ち外に出たところでまずこう言った。

「日本よりもまだ」

「そうですね」

しかし隣にいる昌信は平気な顔である。二人はそれぞれ長袖にジーンズである。長袖が暑いことの原因だが横にいる初老で白髪の人が定文に言ってきた。

「それでもですよ、牧野君」

「はい」

定文もその人に対しては素直に応えた。礼儀正しい声で。

「ここに来たのはね。ただ来たのじゃありませんから」

「オシツオサレツですよね」

「そうです。稲垣君から聞いていますね」

その人は真面目な声で彼に問うのだった。

「あの動物のことは」

「本当にいるんですか？先生」

ここで定文はその白髪の人と呼ぶのだった。

「ここに」

「いますよ」

その先生、美作先生ははっきりと定文に答えた。

第三章

「間違いなくね」

「あれってロフティングの小説じゃないんですか？」

そのドリトル先生の作者である。

「完全に創作の」

「このアフリカはですね」

先生は定文の問いには直接は答えずにまずはこう言うのであった。

「あまりにも広いです」

「それはわかっていきますけれど」

「ですからわかっていないことも多いのです」

やはり答えずに己の言葉を続ける。

「そう、あまりにも」

「それでオシツオサレツがいるってことになるんですか？」

「アフリカに熊はいません」

とにかく答えずに自分の言葉を話す。

「ですが」

「ですが？」

「見たという人もいます」

「っていうかアフリカに熊はいなかったんですか」

そのこと自体定文の知らないことだった。今聞いてはじめて知ったことである。

「あれって何処にでもいるんじゃないんですか？」

「ですがアフリカにはいないのです」

先生は定文の知らないことを完全に自分が知っているから相手も知っているという考えの下で語る。実に面倒な思考パターンである。

「しかし見たという話が結構ありまして」

「そうだったんですか」

「そしてライオンも」

話は今度はライオンに飛ぶ。

「水のライオンと岩のライオンがいます」

「何ですか、それ」

定文にとつてはこれまた初耳であつた。

「水の中を泳ぎ回ったり岩の上に住んでるライオンですか？」

「その通りです」

「ああ、あれですね」

ここで声をあげたのはこの場ではこれまで沈黙を守っていた昌信だつた。

「あのサーベルタイガーに似ていて河馬を殺すのと岩の上で咆哮しているという」

「はい、そうです」

先生は納得した顔で頷きながら昌信のその言葉に頷くのだった。

「そのライオンです。二種類いる」

「アフリカにはまだまだ多くの謎があるんですね」

二人でそう勝手に結論付ける。定文が今こうしてここにいることを決めたのと同じ流れだつた。やはりかなり強引な流れであつた。

「だからオシツオサレツも」

「ですが稲垣君」

「はい」

「オシツオサレツはいますよ」

先生は自信に満ちた声で彼に述べた。

「それは間違いありませんから」

「そうなんですか」

「私は情報を手に入れました」

顔を上げ毅然とした声で述べる。

「ですから。間違いありません」

「何処ですか？」

「インターネットです」

自信に満ちた声で定文の問いに答えた。

「検索したら出て来ました」

「そうだったんですか」

情報の出所を聞いて思いきり駄目だと思つ定文だった。顔には出しているが言葉には出していないので先生と昌信にはわかっていないだけだ。

「英語で書いていまして。そこはですね」

「何処ですか？」

「ついてきて下さい」

二人に対して言ってきた。

「既に車は手配してもらっていますので」

「早いですね」

「疾風怒濤」

これまた実は大袈裟な言葉であつた。

「それが私の行動哲学ですから。既にここに来るまでに全て手配しておきました」

「それで何処に行くんですか？」

「カメルーンとの境です」

とりあえずサッカーに詳しくないとあまりわかりそうにもない国名が出て来た。定文も昌信もサッカー部ではないがそれでもサッカーには興味があつたのでどの国かはわかつた。

「そここの国境の森林地帯にいますので」

「そこにですか」

「車だとたつぷり一日はありますね」

「これまた随分な距離であつた、

「では。行きますか」

「いきなり一日ですか」

「アフリカでは短い時間ですよ」

一日と聞いて憚然とする定文への言葉だった。

「ですから。さあ」

「わかりました。それじゃあ」

「行きましょう」

こうして三人は先生が既に手配していた車に乗ってそのカメルーンとの境に向かうことになった。中古の日本車は悪路にもそこそこいけて快適だったが一日どころか二日かかった。境に辿り着いた時定文はへとへとになって車から出て来たのであった。

「ここですよね」

「はい、ここです」

へとへと定文に対して先生は全く平気な顔であった。昌信は暑い中でも車の中ですよすやと寝ている。どうやら何処でも寝られる体質らしい。

「この森です」

「凄い森ですね」

森というよりはジャングルだった。三步先さえ鬱蒼として見えないう。その中に何がいるか全くわからない。とりあえず入りたくはない場所だった。

「ここって」

「ここにいますよ」

「そのオシツオサレツがですか」

「ああ、着いたんですね」

昌信の声が聞こえてきた。

「意外と早かったですね」

「一日遅れでかい!？」

呑気な顔で目をこすりながら車から出て来た昌信に対しての言葉だった。

「それで早いつて」

「だからここはアフリカじゃない」

「アフリカだから何でもいってわけじゃないだろう?」

「だからさ。日本の常識は通用しないんだよ」

彼は極めて落ち着いた声で定文に返すのだった。

「だからオシツオサレツだっているんじゃない」

「あんな動物何処にもいないよ」

この期に及んでもという感じでムキになって言う定文だった。

「そんな前後に頭がついているなんて」

「信じる信じないは勝手です」

先生はここで彼に対して言うのだった。

「ですが。真実は一つです」

「いないっていう真実がですよね」

「それじゃあさ」

ここでまた昌信が彼に言うてきた。

「あれは何なの？」

「あれ!？」

「そう、あれ」

昌信は自分の真正面を指差して言う。

「あれ。っていうかこれだね」

「これ……」

ここで自分の周りを見る定文だった。すると。

第四章

そこにいた。山羊に似た生き物がところであつた。

「えっ!？」

定文はその生き物を見て思わず声をあげてしまった。

「頭が前にあつて」

まずその頭を見る。確かにある。

「そして後ろにも。同じものが」

「あるね」

その彼に昌信が答えた。

「あるよね。しっかりと」

「嘘だろ!？」

足はしっかりと四本ある。間違いない。

だがそれと一緒に頭が前後に一つずつあるのだ。やはり二つある。常識で考えて有り得ない、そのオシツオサレツがいるのであつた。

「本当にいるなんてよ」

「牧野君」

しかしここで先生が彼に声をかけるのだつた。

「人間の目はですね」

「人間の目は」

「嘘はつきませんよ」

こう彼に言うのである。

「心は嘘をついても目は嘘はつかないのですよ」

「じゃあこれはやっぱり」

「そう、オシツオサレツです」

はつきりと彼に告げるのであつた。

「紛れもなく。オシツオサレツです」

「嘘だ……」

目は嘘はつかないと言われてもこう言わざるを得なかつた。

「こんなのつてよ。本当にいるなんて」

「僕の言った通りじゃない」

「ここで昌信がまた彼に言う。」

「いたでしょ？実際に」

「何でこんなもんいるんだ？」

「定文は次には首を傾げさせた。」

「こんな訳のわからないものが。どうしてなんだ？」

「わからないのですか」

「全く」

「また先生に答えた。」

「こんなのが本当にいるなんて。何でなんだ」

「世の中には色々わからないことがあります」

「先生らしい理路整然とした言葉ではある。」

「ですからこのオシツオサレツもまた」

「いるんですか」

「そういうことですよ。問題は最初から有り得ないと決め付けられないことです」

「最初から決め付けない」

「その通りですよ。現にオシツオサレツは今ここにいますね」

「はい」

もう認めるしかなかった。実際に今彼の目の前に動いて草をその前後の頭でむしゃむしゃと食べている。それは疑いようがなかった。

「それはもう」

「頭が二つになったのは最初は突然変異だったそうです」

「あれですよね」

「昌信が先生に対して応える。」

「頭が二つある蛇と同じですよね」

「その通りです」

「それなら僕も知ってます」

定文も頭が二つある蛇のことはテレビ等で知っていた。あの蛇も

信じられないものがあるがそれでも本当にいるのは事実である。

「見ましたから。テレビですけれど」

「それと同じです。そしてです」

「ええ」

先生の話はさらに続く。

「アフリカは何しろ肉食獣も多いので」

「それに備える為に定着したんですか」

「その通りです。ですからこうなったのです」

博士はオシツオサレツを見ながらまた述べる。

「頭が二つの生き物に」

「そうだったんですか。それで」

「ちゃんとトイレもできますし身体の構造も普通ですよ」

先生はそれはちゃんと保障するのだった。見れば後ろの頭の下
ところに肛門等もある。見ればこのオシツオサレツはオスであつた。

「後ろの頭が尻尾のかわりに出ているだけで」

「そういうことですか」

「そうです。何はともあれオシツオサレツは本当にいます」

「そうですね」

とにかくこれだけは間違いがなかった。最早否定しようがない。

定文は今はいつかりとした顔で頷くばかりであつた。

「わかりました」

「わかつて頂き何よりです」

先生はまずはそのことに満足した顔になる。

「それではですね。次は」

「次は？」

「私に付き合つて下さい。宝石を見つけに行きますよ」

「宝石をですか」

「七色に輝く幻のレインボーダイヤモンド」

また随分と派手なものである。

「それが見つかったそうですから。早速調べに」

「ダイヤはいらないんですか」

「調べるだけです」

どうやらダイヤの価値には全く興味がないらしい。完全に研究者として動いている博士であつた。

「ですから。早速」

「はあ」

「じゃあさ、定文君」

昌信が明るく彼に声をかけてきた。

「行こう。今度はそのレインボーダイヤモンドを観にね」

「わかつたよ。それにしても」

急かされながらもまたオシツオサレツを見る。その不思議な生き物は自分がどれだけ不思議な存在と思われているかということは全く意に介さずのどかに草を食べ続けている。彼はそれを見て言うのであつた。

「本当にいるんだな」

最後にこう言つて昌信に手を引かれて車の中に入る。先生が運転するその車はせっかちに出発する。オシツオサレツはその車も意に介することなくただ自分の時間を過ごしているのであつた。

オシツオサレツ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8409f/>

オシツオサレツ

2010年10月8日15時31分発行